



「塵積成山」【文書・記録類】

磐溪が天保 7 年(1836)から作成を始めた貼り交ぜ帳 (スクラップブック)。明治期まで続けられ、「塵積成山」と題された 11 冊と「成山余塵」ほか 5 冊の計 17 冊が残されている。

大槻玄沢像 (磐水先生肖像) 【書画類】

上から順に 師である杉田玄白の百箇日に玄沢が詠んだ自筆漢詩、玄沢の門人が描いた玄沢像と長子玄幹の賛、旧装の軸に書した次男磐溪の外題と識語、そして新たな軸の余白に直接記した孫文彦の識語



大槻磐溪肖像 (袴姿) 【写真】

文久元年(1861)撮影の磐溪還暦のガラス湿版写真。撮影は佐賀藩士で磐溪門人の川崎道民。箱書きは文彦



「大言海底稿」【著述稿本類】

日本初の近代的国語辞典『言海』刊行から約 20 年後、新たに編纂を始めた『大言海』のための文彦自筆の初期草稿で全 56 冊からなる。